

日本の諸宗教

－研修と対話－

NCC宗教研究所 研究員 寺本知正

1. 活動の目的

ヨーロッパは、長い間キリスト教社会であった。そのため、学校教師や教会聖職者の教育も、人口のほとんどがキリスト者であることを大前提としてすすめられてきた。しかし最近数十年の間に多くのイスラームの人々、ヒンズーの人々が移住してきており、誤解にもとづく争いなども起こっている。異宗教間の相互理解や協力は大きな社会的課題である。学校教師や聖職者の教育においても、この現実をふまえて、他宗教の実地学習や対話・協力の経験をつむことの必要性が痛感されている。

NCC宗教研究所では、毎年数名の学生をうけいれて、日本の諸宗教を学び、また諸宗教の人々との対話交流の経験をつむプログラムを、2002年秋学期より開始した。

日本は古くから多宗教が混在する環境にあり、神道、仏教、儒教やキリスト教をはじめとした諸宗教が共存している。日本は宗教の多元性の観点において、大きな貢献をする可能性をもっているといえる。ヨーロッパの将来の宗教指導者となる学生が、日本の宗教的環境に身を置き、日本の諸宗教を学ぶことで、体験と知的学習に基づいた平和の実現へのリーダーシップを発揮することのできる教育を提供することが、当活動の目的である。

2. 活動の内容と方法

「日本の諸宗教－研修と対話－」プログラムは、海外の学校制度にあわせて二学期制とし、半年間を一学期（セミスター）とした、一年間のプログラムである。日程は、秋学期を10月から翌年の3月、春学期を4月から9月とする。このプログラムは、基本的に、(a) 日本の諸宗教に関する講義、と (b) 各宗教教団における研修と対話、とによって構成される。また、学期中には学生は、研究所主催のセミナー、当プログラムの特別講演、諸宗教の人を招いての交流会にも参加する。

(1) 日本の諸宗教に関する講義

全講義が英語による講義であり、日本語未習得者のために日本語語学講義も設けられる。各講義とも、毎週1講義時間（90分）を設け、10週間での全10講義時間を以て一学期の講義とされる。各講義は、一学期ごとに各分野を通史的に履修できるが、一年間（二学期）をもって、日本の代表的諸宗教がすべて履修できるカリキュラムである。また、オリエンテーション期間には、語学、日本の歴史と文学および各講義に関するイントロダクション講義を実施する。

①神道と日本の民俗宗教

秋学期 神道

春学期 日本の民俗宗教

②日本の仏教

秋学期・春学期とも通史的に仏教を講義するが、学期によって、異なる仏教者・宗派を扱う

③日本の新宗教

秋学期・春学期とも通史的に新宗教を講義するが、学期によって、異なる新宗教を扱う

④日本のキリスト教

秋学期 日本のキリスト教史

- 春学期 日本のキリスト教神学
⑤宗教の神学および宗教間対話の論理
秋学期 宗教の神学
春学期 宗教間対話の理論
⑥仏教テキスト講読
⑦日本語語学

(2) 各宗教教団における研修と対話

前年度より、研修をより充実したものとすることに重点がおかれた。

各宗教教団での実地研修は、関西圏に本山・本部を持つ教団には講義期間中を利用して訪問し、関東圏および東北・九州などの遠方地へは、講義期間外に研修旅行として訪れる。

訪問に際しては、各宗教教団には、宗教施設の案内、儀礼の紹介および参加、宗教生活に関する紹介などの便宜をいただき、信仰者との対話を通じて、各々の宗教への理解を深める。

また、他宗教の施設における研修のみならず、日本のキリスト教教会での実習を前年度より実施した。ヨーロッパとは事情の異なるキリスト教会を経験することで、他宗教との共存におけるキリスト教への理解と日本の宗教環境への理解をより深める。

3. 活動の実施経過

(1) 運営委員会の実施

プログラムの運営は、アドバイザー（諮問）およびエグゼクティブ（実行）の二組織の運営委員会が、予算・決算、講義カリキュラムの承認、学生の受講承認などの通常重要事項を、両運営委員会による合同会議によって審議する。また、プログラム実施上にその時々問題となる事項も、同会議によって審議される。

アドバイザー（諮問）委員会は、主としてプログラムの運営全体に関わる事項審議に従事し、エグゼクティブ（実行）委員会は、運営上の個々の問題にも対処し、それぞれが担当する問題の実行上の実行にも従事する。

運営委員会メンバー

《アドバイザー委員》

- ヤン・ヴァン・ブラフト（南山宗教文化研究所元所長）
藤本浄彦（仏教大学教授）
前島宗甫（元日本キリスト教協議会総幹事・NCC宗教研究所理事）
水垣 渉（京都大学名誉教授）
幸 日出男（同志社大学名誉教授・NCC宗教研究所理事）

《エグゼクティブ委員》

- 片柳栄一（京都大学教授）
高田信良（龍谷大学教授）
中道基夫（関西学院大学助教授）
林 忠良（関西学院大学名誉教授）
樋口 進（関西学院大学教授・NCC宗教研究所理事）
宮庄哲夫（同志社大学教授）
水谷 誠（同志社大学教授）
ペテロ・バーケルマンス（オリエンズ宗教研究所）
マルティン・レップ（龍谷大学教授・プログラム運営幹事）

ロバート・ローズ（大谷大学教授）
寺本知正（NCC研究所研究員・プログラム事務担当）

2004年秋学期および2005年春学期の運営のためのアドバイザーおよびエクゼキュティブ両運営委員会の合同会議は、2004年6月に開催され、応募学生の承認やカリキュラムの構成、予算などの諸事項が審議、決定された。また学期中には、計3回開催され、進行中のプログラムに関する諸事項が審議され、決定された。

また、カリキュラムの講義内容とスケジュールおよび実地研修・研修旅行のスケジュール構成に関して、各講師と実行委員による詳細な調整が行われた。

継続審議事項であった学生の居住場所の恒常的な確保および生活援助に関して、専門小委員会によって、国際学生の家およびホームステイ・ホストファミリーの協力を得ることができるとなった。

（2）プログラムの実施

2004年秋学期には正規受講生4名および聴講生3名の参加によってプログラムが実施された。2005年春学期は、2005年秋学期に向けての準備期間とされた。

（3）レセプション

2004年秋学期では、学生を歓迎するためのレセプションが2回、実行委員会主催で開催された。第1回は、NCC宗教研究所理事を招待し、2004年10月4日に開催された。第2回は、プログラムに協力をいただいたホストファミリーの方々などを招待し、2005年1月17日に開催された。

（4）特別講演

各セミスターでは、このプログラム発足とともに、学生の歓迎およびプログラムの外部への貢献を趣旨とした、公開特別講演が、実行委員会主催で開催されることとした。2004年秋学期は、11月5日に寺園喜基氏（西南学院院長）による講演「諸宗教との対話におけるキリスト教の受容-海老名弾正と滝沢克己と私たちの課題-」が開催された。

（5）プログラム参加学生

《プログラム正規受講生》

ドイツの大学から4名の学生が、プログラムを正規受講した。

- （1）男性、ドイツ人。ドイツ・ハイデルベルグ大学でプロテスタント神学を専攻。牧師候補生。
- （2）男性、ドイツ人。ドイツ・ゲッティンゲン大学でプロテスタント神学を専攻。牧師候補生。
- （3）女性、ドイツ人。ドイツ・チュービンゲン大学でプロテスタント神学を専攻。牧師候補生。
- （4）女性、ドイツ人。ドイツ・ニュールンベルグ大学で宗教教育学を専攻。宗教科教師を希望。

《プログラム聴講生》

2004年秋学期には、1名の日本人および2名の外国人が聴講参加した。

（6）講義の実施

セミスター準備期間において、担当責任講師と実行委員による詳細な講義計画が立てられた。各講義においては、各担当責任講師が講義を担当するとともに、専門領域に関しては他の講師を依頼して各講義全体のコーディネートも担当する。

各講義では、専門性の高い領域に関して、新たに講師を迎えることができ、より充実したカリキュラムを実施することができた。新たな講師は以下である。

- ・日本のキリスト教
原 誠（同志社大学教授）

①講義日程

《2004年秋学期》

◆オリエンテーション期間

2004年9月21日より10月1日

◆講義期間

2004年10月5日より12月10日

②講義カリキュラムおよび講師

◆神道

担当責任講師：幸 日出男（同志社大学名誉教授）

・神道入門およびまとめ（2講義時間）

講師：幸 日出男

・神社、儀礼および祭り（3講義時間）

講師：大垣豊隆（前伊勢神宮教学科長）

・神話、神観念、世界観および多様な神道（6講義時間）

講師：ペテロ・クネヒト（南山大学教授）

◆日本の仏教

担当責任講師：ロバート・ローズ（大谷大学教授）

・日本仏教入門、奈良時代から鎌倉時代の仏教、まとめ（7講義時間）

講師：ロバート・ローズ

・日本の禅仏教（2講義時間）

講師：クリスチャン・ビッテン（京都大学人文科学研究所教授）

・日本の近代仏教（1講義時間）

講師：寺本知正（NCC宗教研究所研究員）

◆日本の新宗教

担当責任講師：マルティン・レップ（龍谷大学教授）

・日本の新宗教入門および神道系・仏教系の新宗教、まとめ（8講義時間）

講師：マルティン・レップ

・天理教（1講義時間）

講師：東馬場郁生（天理教校講師）

◆日本のキリスト教史

担当責任講師：幸日出男（同志社大学名誉教授）

・日本のプロテスタント史（3講義時間）

講師：原 誠（同志社大学教授）

・キリシタン史（2講義時間）

講師：東馬場郁生（天理教校講師）

・キリスト教土着化の最近の試み（1講義時間）

講師：中道基夫（関西学院大学助教授）

・日本の実践神学（2講義時間）

講師：深田未来生（同志社大学教授）

・まとめ（1講義時間）

講師：幸 日出男

（今学期は、通常では春学期に実施する日本の神学に関する講義も、特別講義として実施された。）

・武藤一雄の思想- 京都学派の哲学とキリスト教-

講師：林 忠良（関西学院大学名誉教授）

・日本の神学

講師：水垣 渉（京都大学名誉教授）

◆宗教の神学

担当責任講師：ヤン・ヴァン・ブラフト（南山宗教文化研究所元所長）

・宗教の神学（10講義時間）

講師：ヤン・ヴァン・ブラフト

◆仏教テキスト講読

・『宗教とは何か』（西谷啓治著）講読（10講義時間）

講師：松井吉康

◆日本語初級

講師：栢原玲子（園田女子大学）

（7）実地研修の実施

実地研修は、（1）講義期間中に関西圏に本山・本部をもつ各宗教教団を各週に訪問する研修、および（2）講義期間外に関東、東北、九州などの遠方地へ各年に一度訪問する研修旅行、によって実施される。

昨年度より、この実地研修を充実したものにすることが試みられ、今学期においても、その試みが継続され、より充実したものとなった。また、日本のキリスト教教会における研修も充実が図られた

≪2004年秋学期≫

（1）研修

◆諸宗教教団施設における研修

【神社】

吉田神社、下賀茂神社（以上京都市内）、春日大社、手向山神社（以上奈良市内）を訪問。

【仏教寺院】

東大寺および興福寺（以上奈良市内）、真如堂および黒谷、大徳寺、妙心寺、西本願寺（以上京都市内）、高野山、比叡山延暦寺を訪問。

（以上の中、大徳寺では松波諦雲師、天竜寺ではトーマス・キルヒナー師、から禅の実践と講義の研修を得、西本願寺では寺本知正妙心寺では西田久美子氏、高野山ではペテロ・バーケルマンズ氏、比叡山延暦寺ではロバート・ローズ氏より、研修を得た。）

【新宗教】

天理教本部およびおやさと研究所を訪問、東馬場郁生氏（天理教校講師）による研修を得た。

【キリスト教教会】

日本聖公会奈良基督教会（奈良市内）、在日大韓基督教会京都南部教会、フランシスコの家およびキリシタン博物館（京都市内）を訪問。

（以上の中、奈良基督教会では古賀久幸師、京都南部教会では李大京牧師、フランシスコの家ではルカス・ホルスティング師による研修を得た。）

【提携研究所】

イタリア国立東アジア研究所、フランス国立極東研究所（以上京都市内）を訪問。

◆キリスト教教会における実習

【講義期間中の実習】

・室町教会（京都市）

ドイツ人女性（チュービンゲン大学神学部生）受講生が、説教の機会を得た。

・京都南部教会（京都市）

ドイツ人女性（ニュールンベルグ大学宗教教育科学生）受講生が、日曜学校に出席、説教の機会を得た。

・同志社教会（京都市）

ドイツ人男性（ゲッティンゲン大学神学部生）受講生が、説教の機会を得た。

・洛陽教会（京都市）

ドイツ人男性（ハイデルベルグ大学神学部生）受講生が、説教の機会を得た。

【講義期間後の実習】

ドイツ人男性（ハイデルベルグ大学神学部生）受講生

佐渡教会（新潟県佐渡島・三村修牧師）およびドイツ東京横浜教会（東京都・エリザベット・ヒュプラー・ウメモト牧師）で数週間の実習を積んだ。

ドイツ人男性（ゲッティンゲン大学神学部生）受講生

信濃町教会（東京都・南吉衛牧師）および鎌倉教会（神奈川県・荒井仁牧師）で数週間の実習を積んだ。

ドイツ人女性（チュービンゲン大学神学部生）受講生

西千葉教会（千葉県・池田宣世牧師）で数週間の実習を積んだ。

（２）研修旅行

2004年秋学期の研修旅行は関東圏で実施された。

◆実施日程：2004年12月11日から18日

【立正佼成会本部】（東京都内）

International Buddhist Congregation RKKの萩原透公師によるコーディネートで、施設内の案内、Gene Reves師による講義、立正佼成会の活動および国際事業に関する講義、スタッフとの対話の機会を受けた。また、昼食の御用意もいただいた。プログラム運営委員である林忠良氏も同行し、参加させていただいた。

【富坂キリスト教センター】（東京都内）

ミラ・ゾントーク氏（EMS派遣宣教師）による特別講義「無教会」。

池田 伯牧師（日本基督教団牧師）による特別講義「日本基督教団—その歴史と構造—」。

【上智大学】（東京都内）

マーク・マリンズ氏（上智大学）による特別講義「日本の土着化したキリスト教」。

【青山学院大学】（東京都内）

大庭昭博氏（青山学院大学）のゼミナールに参加、日本人神学生との対話を得た。

【日本キリスト教協議会本部】（東京都内）

日本キリスト教協議会本部を訪問、畠澤明枝氏との対談を得た。

【日本キリスト教団】（東京都内）

竹前昇牧師（総幹事）および上田博子牧師（宣教部幹事）との対談を得た。

【鎌倉市】

荒井 仁師（元日本キリスト教団幹事）による鎌倉市内の神社・寺院の見学案内と特別講義「日本の多宗教環境における宗教教育」。

【東京都】

靖国神社および戦争博物館、明治神宮、信濃町教会を訪問。

【MOA美術館】（熱海市）

世界救世教設立の美術館である、MOA美術館を訪問。

4. 活動の成果

活動成果の主眼目は、二点に集約される。一つには、何よりも、このプログラムに参加した、将来、教会の聖職者や学校の教科担当教師となる学生が、自分の育ってきた宗教以外についての正確な知識を得て、それによって寛容な精神、宗教間相互理解の重要性の認識をもち、自己の宗教伝統への謙虚な反省心のある指導者となる研修の場を提供できたことである。

二つには、このプログラムの存在と実施自体がもたらした成果である。当プログラム実施にあたり、宗教界内外から、プログラム理念への理解と実施の協力を得ることができた。そのことによって、宗教間、宗派・教派間の信頼関係、協力関係が、さらに促進された。このことは、学生にとっては、宗教間対話・宗教間協力、そして宗教の平和的共存の現場に正しく立ち会わせていることになる。

以上の2つの視点から、(1) 講義、(2) 実地研修、(3) 外部評価、(4) 協力者 (5) 学生の成果、に関して成果をまとめてみたい。

(1) 講義

日本の諸宗教を、英語によって講義するという点は、当プログラムの講義の非常に革新的な点である。そのことによって、海外の諸大学や諸研究機関において日本の諸宗教を学ぶのではなく、日本に滞在して日本の諸宗教を学ぶことが可能となった。

また、日本の諸宗教を包括的に講義することにおいて、少数の講師がすべての諸宗教を講義するのではなく、各々の分野を専門とする多くの研究者が講師として講座を担当することも、当プログラムの大きな特徴である。このことにより、他宗教に関する偏った知識に基づいた誤解や先入見が正され、正確な知的理解を得ることが可能となった。また、各々の立場から各専門分野が講義されることによって、他宗教を一面的に解釈するのではなく、広く体系的に理解することも可能となる。

他宗教の伝統を理解していくこととは、他宗教を問うと同時に、自らの宗教伝統を問い返していく作業である。およそ、他宗教の伝統に対する一面的な解釈とは、もとを正せば自らの伝統に関する一面的な理解に端を発すると言えよう。その点において、当プログラムの講義では、多数の講師による多面的な講義が、学生をして自らの伝統や立場を問い返す視点を多面的に得るということになる。それは、「自らの伝統の立場から他の伝統を一面的に解釈し位置づけようとする」ことから、「自らの立場を相対化して他の伝統を理解しようとする」ことに転換していく作業である。そのことは、学生の諸宗教理解に大きな成果をあげたと考えられる。

このような講義を通して、学生は他宗教の理解を進めると同時に、自らの宗教への理解も深めることになる。現実に大きな摩擦の原因となっている自他への一面的な偏見を乗り越え、他にも自らにも謙虚になって学ぶ姿勢が、宗教間の相互理解と共生をはかることにとっては重要である。その観点から、当プログラムの講義は大きな成果をあげたものと考えられる。

(2) 実地研修

諸宗教教団における研修では、前学期に比してより多くの教団から協力をいただくことができた。訪問に際しては、各宗教教団には、宗教施設の案内、儀礼の紹介および参加、宗教生活に関する紹介などの便宜をいただいた。信仰者との対話を通じて、講義における他宗教の知的理解だけではなく、実地に各々の宗教との交流を持ち、活動や信仰者の人格を通じて理解を深めることができた。

また、研修旅行では、4回の特別講義が実施された。

キリスト教教会の活動に参加する研修では、学生の教会での説教、そして学期期間後の教会実習が実施された。ヨーロッパとは事情の異なる日本のキリスト教教会でのこうした研修は、他宗教との共存におけるキリスト教を実地に経験することになり、学生にとっては、ヨーロッパという枠組みの中に限られていたそれまでの自己のキリスト教理解が、より大きな理解へと深められた。そして、自らの宗教伝統であるキリスト教との関わりにおける日本の宗教環境への理解が開かれた。

(3) 外部からの評価

ここでは、当プログラムに関する記事が他団体機関誌に載せられたものを紹介することで、外部からの評価を得ていることを示したい。また、プログラムの理念と実施が、メディアに紹介されることでもたらされる社会への波及効果を、成果の一つとして考えたい。

プログラム受講後に、母国に帰国する学生との連絡を保ち、宗教間相互理解と共生の理念に基づいた宗教活動や教育の場での彼らの活躍の一助となり続けることができるように、体制を整えることも大きな継続課題であった。このことに関して、EMSは、プログラム受講生を一同に会したシンポジウムを開催し、日本の他宗教環境において学習と研修の経験を積んだ学生たちの意見を内外に広めた。また、受講生たちは、それぞれに機関誌や新聞にプログラムでの経験を発表しており、当プログラム受講者のヨーロッパにおけるネットワークは拡がりつつある。

- 1 : 「Erfahrungsbericht ueber ein dreiwoechiges Praktikum in der Nishi Chiba-Gemeinde in Japan」
(『Mission Aktuell』2005年2月)
- 2 : 「Im Dialog mit Japans Religionen 1」 (『Der Weg der Goetter』EMS-Dokumentationbrief Nr.3/2005)
- 3 : 「Zwischen Zen-Garten und Shinto-Schrein」 (『darum-journal』Okt./Nov.2005)
- 4 : 「Kaltes Wasser in der Waschmaschine -Erlanger Theologie-Student erlebte Wundersames bei einem Aufenthalt in Japan」 (『Nuernberger Nachrichten』2004年11月26日)

(4) 協力者

2004年秋学期では、国際学生の家およびホームステイ・ホストファミリーより、学生滞在の協力を得ることができた。今後とも当プログラム受講生の滞在先としての協力をいただいた。

そして、庭野平和財団からは、助成をいただき、この助成によってプログラムが実施可能になったといっても過言ではない。

富坂キリスト教センターからは、東京研修旅行のコーディネイトをいただいた。

また、イタリア国立東アジア研究所、フランス国立極東研究所、国際交流基金(ジャパンファウンデーション)京都支部からは、図書館提携の便宜を受け、学生がそれぞれの図書館を利用できることが継続された。

(5) 学生の成果

以下に当学期正規受講生の学生のコメントの一部を紹介したい。

「ISJPへの参加を決意したことには多くの理由がありますが、ここではそのいくつかを述べるにとどめます。よく知られたことですが、グローバリゼーションと呼ばれる今日の世界の状況があります。文化や経済、科学には、このグローバルな規模での世界の関連性やコミュニケーションが非常に明瞭に映し出されています。しかし、私の意見では、神学(特にヨーロッパにおける神学)は、この新たな展開を十分にはキリスト教や西洋人の精神性に反映していません。ドイツでは東アジアの宗教性に関する書籍出版や映画上映、講演などが増加しています。同時に、国はキリスト教国から、複数の文化・宗教が混在する社会へと急速に変貌しています。この展開は確実に続いていくことで、牧師になるべく勉強している私の立場にとっても大きな変化が求められています。

これらの事情を考慮するとき、ISJPは非常に意義深く、また有用なものであることが分かります。他宗教と共存する環境の中であって神学を追求することは非常に魅力的であり、伝統的な神学の本流とは全く異なる方法でしょう。NCC宗教研究所では、実りのある挑戦を経験しています。新たな視点からの疑問を熟考して、古い思考パターンを脱し、新たな思考を構築することや、宗教間対話に経験ある研究者たちの講義を聴き、他の生徒を交えて議論することは、私にとって新しい地平を開いてくれます。」
(ドイツ人男性受講生・ハイデルベルグ大学神学部生)

「2000年に高校を卒業した後、私はスウェーデンに一年間滞在しました。この経験は、自国を外から眺めたときにそれまでとは違った深い理解が得られることを、私に教えてくれました。ですから、私自身の精神性と神学とに、同様の経験がしたく思いました。どの国に留学すべきか、しばらくの間迷っていたところ、友人からNCC宗教研究所の案内を見せられ、I S J Pにとっても関心を引かれました。特に、教室での講義に加えて、他宗教の人たちに実際に出会う研修があることに非常に魅力をおぼえました。これが、私が日本へ来ることになったきっかけです。

I S J Pに参加することによって、印刷されたリストとして存在していた先生方の名前や講義が、実物と実際の内容を伴って目の前に現れました。プログラムは予想をはるかに越えた素晴らしいものです。特に講義の質の高さには驚かされ続けています。また、京都での生活も楽しんでおり、国際学生の家にアジアの国々からの留学生たちと一緒に暮らしています。彼らの様々な関心や問題に耳を傾け、そして間接的には彼らの精神性にも学ぶ機会を得ることができます。アジアからの留学生たちは、ドイツ文化とキリスト教に関してたくさんの質問をしてくれます。このことによって、私は新たな眼でドイツとキリスト教とを見つめ直しています。」

(ドイツ人女性受講生・チュービンゲン大学神学部生)

「ドイツの都市部では、すでに教会が少数派のものとなっている状況がしばしば見られます。日本のようにキリスト者であることが少数派である状況が通常であることになったとき、教会生活はどのような変化をとげるのでしょうか？」

少数派の教会と国家との関係はどうなるのでしょうか？日本では、教会は国家からどのような権利を認められているのでしょうか？教会は国家に対して、より批判的な関係を展開しているのでしょうか？日本では、国家はキリスト教のような新宗教に対してどのような関係性を形作ってきたのでしょうか？宗教は国家に対してどう働きかけ、国家は宗教にどう作用するのでしょうか？さらに、文化はどのように宗教を基底として発展し、そしてその文化はどのように社会に影響を与えるのでしょうか？」

I S J Pに参加することによって、私はこれらの問いへのとっかかりを得ました。しかし、すぐにまた新たな問いが起きました、それは特に多宗教の平和な共存の可能性に関してです。日本での残りの時間が、後にドイツで学び働く私の人生にさらに新たな答えと視点をもたらしてくれるようにと思います。」

(ドイツ人男性受講生・ゲッティンゲン大学神学部生)

「日本へ来たのは、他宗教に理解を深めたかったからです。大学ではヒンドゥー教や仏教、ユダヤ教やイスラムなどに関してたくさんの講義を受けましたが、教室での勉強は満足のいくものではありませんでした。私は、それぞれの信仰者によって実践されている生きた宗教を知りたかったのです。そうしてこそ、より深くその宗教を理解することになると思います。それぞれの宗教では、信仰者にとっては何が本当に重要なのかを知ることができるからです。

日本のような多宗教環境にある国では、様々な他宗教の人たちと出会い、議論することができます。そのことは、自分自身の限られた立場で一方的に他宗教を見るのではない、新しい視点を私にもたらしてくれます。他宗教の人だけではなく、日本では少数者であるキリスト者との交流も、これまでの私の視点に変化をもたらしてくれました。

一方ではこのように広い視点を得るとともに、そのことは同時に自分自身の信仰をより確かなものとしてくれます。他宗教の人たちとお互いの信仰に関する話をすれば、私は私自身の信仰に関して話すために、深く考えなければなりません。このような会話を通じて、私の宗教であるキリスト教は私の信仰に深く結びついていきます。逆に、キリスト教を外側から眺める視点をすることで、他宗教に対して開けた意識を持つことができます。

他宗教の人たちとの対話を通じて、さらに意識を開いていき、お互いに改宗を迫るような方法ではない対話の能力を高めたいと思います。キリスト教社会であるドイツではほとんど不可能なことです。私は他宗教者と平等な仲間として話していきたいと思っています。」

(ドイツ人女性受講生・ニュールンベルグ大学宗教教育科学生)

5. 今後の課題

外部評価の項で示したように、プログラム受講生のヨーロッパにおけるネットワークは広まりつつある。シンポジウムの開催や、新聞・機関誌等への発表によって、プログラムの持つ宗教観平和の理念、および日本での多宗教共存の経験を得た学生たちの声が内外に広まっている。そのさらなる拡充と、宗教間平和の活動に関する日本・ヨーロッパ間の連絡・協力をさらにすすめていくことが望まれる。

また、多宗教間の対話シンポジウムの開催が望まれる。学生にとっては、日本における諸宗教間の相互理解と共生が、対話という場面でどのように具体的に展開されるかを経験する事は重要である。対話には、知識や理念を前提とした上での具体的な対話経験の積み重ねが非常に重要であり、そのような対話によって宗教間の協力や信頼関係が進展する。このような機会をより増やしていくことが望まれる。